
閃光花火

弥生雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閃光花火

【Nコード】

N4098Q

【作者名】

弥生雨

【あらすじ】

人間の胸に花火を見ることができると知っているだろうか。

「ぼく？はある日、眼鏡を外すと人の胸に花火を見ることができるとを知る。」

そして夜の神社で出会ったクラスメイトの？朝比奈aska？も、同じく眼鏡を外すと人の胸に花火をみることができるとを知り。

花火を題材にした短編恋愛小説です。

せんこうはなび
閃光花火

人間の胸に『花火』を見ることが出来る人を知っているだろうか。ぼくは、一人だけ知っている。

それは誰でもなく、ぼく自身である。

花火が見えるようになったのは、ある日の夜のことだ。

ぼくはかなり視力が弱いので、ほとんどの時を、メガネをかけて過ごす。

メガネを外すと、カンバスに水を落としたように景色が滲んでしまう。

あまりに目が悪いので、メガネがなくてはろくに外を歩くこともできない。

ふと、闇夜の中を、街燈を頼りに裸眼で歩いてみたいと思った。どうしてそう思ったかなんてさっぱり分からない。

しかし、すぐさま実行してみることにした。

ぼくは思い込んだらすぐさま行動しないと気が済まない質だ。

学校からの帰り道、本屋に寄って時間をつぶした。

そして、日が落ちて、辺りが真っ暗になったところで店を出た。

冷めた空気が、つんと鼻をついた。

口や鼻から出た息が、白く染まる。

もう、すっかり寒くなった。

ぼくはため息をついて、メガネを外した。

眼に映るもののすべてに、もやがかかった。

一寸先も見えないくらいである。

辺りを見回しても、ろくに見えやしない。

信号機のライトが、薄い霧を纏いながら輝いていた。

眼を細めると、ようやくなにかが目の前を通過してゆくのが見えた。

ぼくは歩き始める。

メガネというものは不思議だ。

あんな、牛乳瓶の底のようなレンズを通しただけで、世界をくつきりと見ることが出来る。

でも、なんとなくそれは本当の世界じゃないように、ぼくは思う。いつもはヘッドホンで音楽を聴きながら通る道を、今夜はなにも聴かずに歩いている。

耳元にまで、自分の足音がはっきりと聞こえる。

真水を被ったような寒さと、冷えたアスファルトの匂いが足音と重なって、ぼくを不思議な気持ちにさせる。

いつも当たり前のように歩いている道も、こうして状況を変えてみると、初めて歩くような気分になる。

眼を凝らしながら、ぼくは自宅へと歩を進める。

そして、気がついた。

最初は、自転車のさきに付いているライトの光かと思った。

しかし、それは霧のマントを羽織ったうすぼけた光ではなく、もっと明るく、もっときれいで、もっと鮮やかなものだった。

すれ違う人々の胸に、それがあった。

花のようにも見える。

けれども、花じゃない。

ぱちぱち、ぱちぱちと、音は聞こえないけれども、静かにはじけていた。

花火だ。

直観的にそう思った。

本物の花火よりも勢いは劣るけれども、確かに、生き生きと火花を散らしている。

とはいえ、目に入る人間の花火、全てがきれいだというわけではなかった。

中には、どぶ川の水のような色をしたものや、ヘドロのような色をしたものもある。

当然、光が強いものや弱いもの、火花の大きいものや小さいものまであった。

この花火は一体、なんだろう。
考えながら、ぼくは家へ向かう。

花火とすれ違いながら、ずっとそのことを考える。

いや、待てよ。

そもそもだ。

なんでぼくはそんなものが見えるのだろう。

ために、ポケットからメガネを取り出して、かけてみた。

ぼんやりしていたものが輪郭を取り戻す。

車道を走る車や、歩道を歩く人がすっかり見えた。

そして、花火は見えない。

メガネを外してみる。

すると、景色がぼやけるかわりに花火が見えるようになった。

これは……なんとも不思議だ。

首をひねりながら、外したメガネを眺める。

こんなものを通すだけで見えなくなる花火の正体が、さっぱり分からない。

そして、ぼく自身、どうしてそれが見えるのかもさっぱり分からない。

ポケットにメガネをしまい、ため息をつく。そして、歩みを再開する。

どうしたもんかな……。

ぼやきながら、空に顔を向ける。

メガネをかければ、満天の星を見ることができらるだろう。

でも、今は叶わない。

底の見えない暗闇が、大口を開けているようにしかぼくには見えない。

あの花火、実は星だったりするのかな、なんて考えてみる。

空ばかりにきれいな星があるのはずるいから、人間が神様に頼ん

で、地上にも星を与えてもらったのだ。

そうだとしたら、なかなか夢のあるものなんだな、と思えてくる。しかし、実際のところはどうなのか分からないので、憶測の域を出ない。

ふと気になって、自分の胸に視線を落とした。

なにも見えなかった。

ぼくとすれ違ったりした人達の胸には、大小美醜様々だが、なんらかの花火が存在した。

でも、ぼくの胸にはなにもない。

どうしたことなのだろう。

ぼく自身の花火は見る事ができないのか、それとも、ぼくには花火が存在しないのか。

謎はますます深まるばかりだ。

一度考えることを止めて、ぼくは改めて、この景色を楽しむことにした。

難しいことは後で考えればいい。

暗闇に浮かぶ花火。

それだけで、なんとなくロマンティックじゃないか。

これを見ることができる人がどれくらいいるのか知らないけれど、今のところはぼくだけだ。

ぼくだけが、この花火を一人占めしている。

嬉しいことだった。

世界で一人、ぼくだけだ。

緑色の水風船がはじけているような花火を宿した人とすれ違いながら、ぼくは先へと進む。

濡れた土の香りが、微かに漂ってきていた。

そして、ぼくが歩みを進めるごとにどんどん強くなってゆく。

ぼくの家は学生マンションの一室で、都会にある。

自宅から五分ほど歩いたところに、かなり大きな神社があって、そこはアスファルトに包まれた街の中で、唯一自然が息づいている

場所だ。

雨の日に神社の近くを歩くと、湿った木と土、そしてアスファルトの香りが、ぼくの意識を地元の家へと導く。

実家が恋しくなった時には、雨降りの日を狙って神社を通る。

今日は雨が降っていないので、土の香りだけが強い。

ふと立ち止まって境内をのぞき見た。

一見、誰もいないようである。

しめた、と違ってぼくは立ち寄ることにした。

闇が落ちてくるような時間に、こんな神聖な場所に入るとぼちがあたるかもしれない。

けれども、いまのぼくは好奇心の方が勝っていて、恐怖心などほとんど吹き飛んでしまっている。

固い鉄板の上で擦れるような音色を出していた足音が、やわらかいベッドを靴で踏みしめているような音に変わった。

足の裏の感覚も、土の上の方がしっくりくるような気がする。

樹木のどこか泥くさい香りに、葉っぱの青臭い匂いが加わった。

鼻の奥でその芳香を味わい尽くしながら、一際大きくて太い木のそばに立った。

背伸びをしながら深呼吸する。

学校で蓄積したそれまでの疲れが、消し飛んでしまうように思えた。

風呂に入った後のような清涼感を感じる。

リフレッシュする、とはこのことを言うのだろうか。

妙に眠くなって、軽く眼を閉じる。

今ならぐっすり眠れるような気がした。

漂ってきた眠気に身を任せようとした時、ざくり、という足音が、すぐそばから聞こえてきた。

眼を開いて、考えた。

今の足音は、ぼくではない。

だとしたら、別の人のものだ。

慎重に、注意深く辺りを見回す。
視界の端っこに、小さな火花がぱちぱちと光っているのが映った。
なんだろう。

ぼくはメガネをかけないまま、木蔭から飛び出して、その花火に近づいた。

花火の宿主はぼくに気が付いたようで、「誰？」と聞いてくる。
女の子の声だった。

ぼくは答えず、逆に尋ねた。

「きみこそ、誰？」

闇の中で、もう一度足音が聞こえた。

近づいてくる音だ。

ぼくは身構えもせずに、ただ受身のまま、佇んでいた。

やがて、向こうの声が言う。

「もしかして……夜野くん？」

名前を呼ばれて、ぼくは思わず目を細めた。

ぼくの弱すぎる視力では、花火を見ることはできても姿を捉えることができない。

しかし、その声にはどこか聞き覚えがあった。

メガネをかけようかとも思ったけど、相手が近づいてきてくれるからその必要はないだろう。

「やっぱり、夜野君だ」

闇の中から、彼女は姿を現した。

意外な人物、というほどではなかった。

少なくとも、ぼくの中では。

「朝比奈」

ぼくは彼女の名前を呼ぶ。

彼女はいつもの陰気くさい顔を驚きに染めて、ぼくを見つめ返していた。

朝比奈アスカは、あなたがメガネをかけてなかったから誰なのか分からなかった、と言った。

そう、とぼくは生返事を返した。

彼女には言わなかったが、ぼくも実は、彼女が一瞬誰なのか分からなかった。

彼女がいつもかけているメガネを外していたせいだ。

どこの女の人かと、内心驚いていた。彼女の意外な一面を見た気がした。

「こんな時間に、なにをしてるんですか？」

散歩だよ、とぼくは答えた。

そして、その質問をそっくりそのまま彼女に返した。

「わたしは、その……」

彼女は、所在なさそうに視線を落とした。

なにか、言えないような理由があるのだろう。

それを追求するような趣味は、ぼくにはない。

だから、言いたくなければいいよと告げた。

彼女は、先ほどのぼくと同じように、「そう」「とどこか興味なさげな返事をする。

彼女の胸で淡く儂げに、火花が爆せていた。

ときおり眼が眩むような光を出すそれを見て、ぼくは閃光花火だな、と呟いた。

彼女は聞いていなかったようで、ぼくの顔を見て「え？」ともらす。

なんでもないよ、と言うと、彼女はまた「そう」と呟いて、ぼくの胸のあたりに目を向けた。

そして、じっと睨みつけている。

「どうして？」

言うや、彼女は唐突にぼくへと詰め寄ってくる。

「どうして、ないんですか？」

「なにが？」

平静を装ってとぼけてみたが、内心どきりとした。

まさか、とは思っけけれども、もしかして、朝比奈も人の胸に花火

が見えたりするのだろうか。

そして、どうしてないの、と尋ねてきたということは、やはりぼくの胸にだけ、花火がないのか。

そんなぼくの内心なんて知るはずもない彼女は、

「いえ……なんでもないです。ごめんなさい……」

消え入りそうな声で言っ

「もう、帰ります」

踵を返してゆく。

送ろうか、と尋ねると、彼女は首を横に振って、大丈夫ですと言った。

ふらふらしながら、闇の中へと歩いてゆく。

ぼくは、その後ろ姿が漆黒に溶け込むまで眺めて、消え去ったと同時に、帰路についた。

十

翌日、学校で彼女の姿を見た時、改めてぼくは、陰気くさいな、と思った。

朝比奈はいつも教室の端っこの方で、薄いレンズのメガネをかけて、なにかについての本を読んでいた。

クラスの女子が話かけても、小さく返事をするだけで、ろくに会話をしようもしない。

だから、彼女はクラス中からうとまれているらしい。

ぼくもつい昨日まではあまり意識をしなかったけれども、昨日の今日なので、意識せざるを得ない。

ただし、少し気になった程度のことだ。

別段、ぼくから彼女に話かける必要性もないので、鑑賞するだけにどどまった。

病的なまでに白い肌が、真っ黒な制服からのぞく。

もくもくと読書をする彼女は、ページをめくる動作がなければ人形のように見えた。

メガネを通して見る、輪郭をもった彼女の胸には、花火がない。今朝、登校する際に、まだ見えるのだろうかと思つて、メガネを外して通学路を歩いてみた。

人の花火が見えないことはなかったが、朝の強烈な日差しに競り負けて、ほとんど掻き消されてしまっていた。

やはり、花火を見るのは夜が一番適しているのかもしれない。

それにしても、だ。

西洋の優れた職人によつて、美しく精巧に作られた人形のような容貌を持つ朝比奈を見ていると、昨日の閃光花火と重なつて、胸に重たいものを落とされた気分になる。

彼女をじつと見ていると、そんな様子に気が付いた男友達が、ぼくの肩に手を回してくる。

「さつきから朝比奈ばっかじつと見てるじゃん。もしかして、あいつにほの字なのか？」

「そんなんじゃないよ」

彼女から視線を外して、男友達に向き直る。

適当に話を合わせながら、朝比奈のことについて思いを巡らせていた。

なんだろう、この妙な気持ちは。

どこからか、朝比奈が欲しいかもしれない、という感情が湧きあがってくる。

メガネを外していた彼女の美貌にあてられでもしてしまったのか。もしかしたら、本当にほの字なのかもしれない。

それに、昨日のこともある。

朝比奈と話したいが、今はあまり目立つことをしたくない。

ぼくはいつだって誰かの影を踏むように、ひっそりと生きてきた。あまり目立ち過ぎると叩かれることが多いから、それを避けるためだ。

ほどほどぐらいがいい。

だから、今はこの衝動を抑えておく。

適当にタイミングを見計らって、呼び出せばいい。そう考えて、ぼくは思考を内から外へと戻す。そのうちに先生が来て、ホームルームが始まった。いつものように、話を聞いているふりをする。間もなくホームルームは終了し、授業が始まる。

授業は、流れ作業だ。

板書をとり、ときどき顔を上げて話をきけば、まず平常点は楽にもらえる。

あとは指名されたときに、正誤どちらかの答えを適当に提示すればいい。

居眠りせずにそうしていれば、すぐに授業は終わる。

そうして過ごしてゆき、あっという間に昼休みの開始を示すチャイムが鳴った。

教師が授業の終了を告げる。

挨拶を交わし、教師が教室を出てゆく。

続いて、生徒たちも私語を交えて席を立つ。

ぼくは軽く背伸びをして、首を二回鳴らした。

トイレにでも行こうかな、と席を立とうとしたときに、後ろから、誰かに名前を呼ばれた気がした。

ふりむいて見ると、朝比奈がすぐ傍に立っていた。

思わず、うおっ、となってしまう。

「なんだ、朝比奈か」

胸に手を当てて、ぼくは言った。

心臓のけたたましい脈動が、手のひらに伝わってくる。

対して、朝比奈はぼくの驚きなど意にも介していない様子で、ぼくを睨めつけている。

呼吸を整えながらどうしたんだい、と尋ねると、彼女はついてきてと言って、さっさと先を歩いていく。

断る理由もないので、大人しくついてゆくことにした。

こちら話したいことがあったので、都合がいい。

廊下に出て、北側へと向かう。

突き当たりまできて、右に曲がる。

そこには、教室二つ分の広さを持つ図書室がある。

年季が入っているの、かなりかび臭く、ずっといると気分が悪くなってくる。

できれば長居したくない場所だ。

真つ昼間だというのに、室内は薄暗い。

重苦しい静かさの中で、生徒たちの小さな談笑が重なる。

ときおり聞こえてくる小さな足音とページをめくる音が何とも言えない。

これで匂いがきつくなければいつまでもいたいと思うのに。

このごろ図書館に行っていないので、久しぶりに行ってみるのもいいな、とふと思った。

少なくとも、ここよりはずっと居心地が良いだろう。

ぼくより先に入った朝比奈が、すみっこの席に腰を下ろす。

見習って、ぼくも彼女の真正面に座った。

切れ長の鋭い瞳が、薄いレンズ越しにぼくを睨みつけている。

明るい場所で彼女と向きあうのは初めてだ。

朝比奈の瞳はしんじられないほど暗い。

そして、深い。

奥底をまるで感じさせないほどの深淵を持っていた。

ともすれば、生氣すらも感じさせないほど、とても深い。

暗い人間だな、というのが第一印象であったが、それがよけい強まった。

よく、目を見れば人柄が分かるというが、朝比奈はその顕著な例だ。

これほどか、と思わせるほどの凄みがある。

ぼくは、その迫力に気おされそうになる。

自分以外を信用していない人間の目だ。

ぼくによく似ている。

にやにやしていると、気味悪いものをみるような眼を向けられたので、表情を引き締めた。

「それで、ぼくになんの用？」

「……まどろっこしいのは嫌いなので、すぐに本題に入ります」
朝比奈はそう言った。

「夜野君、見えてますよね。アレ」

ふいに胸が高鳴った。

花火のことだ、と直感的に思った。

「あれって、なんのことだい？」

あえてとぼけてみる。

確信を持たなければ安心できない。

朝比奈は、流麗な眉毛を片方、ついつと上げて、「ふざけてるんですか？」とでも言っているような表情になる。

そして黙った。

言わなくても分かっているんだろう、という圧力だ。

耐えきれなくなったぼくは両手をかるく上げて、降参の意を示した。

「分かった。正直に言うよ。花火のことだろ？ 胸で弾けてる……」

「ええ。やっぱり、見えてるんですよね」

「ということは、きみも見えてるんだね」

朝比奈は小さくうなずいた。

どうして分かったんだい、と訪ねると、彼女は、あなたがちらちらと私の胸元 花火のある部分に目をやっていたから、もしかしたら……と思ったんですと答えた。

胸に手をおき、朝比奈は深々とため息をつく。

安心しているような、困惑しているような、微妙な表情をしている。

あんなものが見えるなんて、どうしてでしょうね……と小さく咳いたのを、ぼくは聞き逃さなかった。

「あれは、なんだと思います？」

「さあね。少なくともぼくは昨日まで、あんなものが見えるなんて知らなかったから」

素直に言っと、朝比奈が眉をひそめて、睨んでくる。

ぼくは事実を言っただけだった。

つい昨日まで、レンズを通したうそくさい世界しか見てなかったのだ。

あんなに鮮やかなものがこの世に存在するなんて、知らなかった。

「知らなくても、推察はできるでしょう?」

彼女の言葉が突き刺さる。

確かに、そうだ。

「命みたいなものじゃないかな」

「命、ですか……」

花火には、派手なものど儂いもの、というイメージがある。

加えて、個人によって勢いは色が違うのは、命の大きさや汚さなのではないだろうか。

悪いことをしている命は、汚い。

いいことをしている命は奇麗だ。

若い人は命が大きいから派手に光っていて、老人は今にも潰えそうな光を発している。

でも、もしそうだとしたら、ひとつだけ矛盾が生じることになる。

「あれが命だっというんなら、夜野君はどうなるんですか?」

そうなのだ。

あれが命の光だとしたら、胸にそれがなければぼくは死んでいることになる。

でも実際、こうして生きているので、この推察は外れだということだ。

じゃあ、違っただろうね。

ぼくは言った。

彼女もうなずいた。

顎に手を当てて、考える。

お互い首をひねりあつて数分後、朝比奈が言った。

「心、じゃないでしょうか」

「心？」

「私はそうだと思います」

朝比奈はおずおずといった。

「でも……それだと、夜野君の心がない、ということになりますよね……」

そうだね。ぼくは穏やかに肯定する。

そんなことはないはずだと、朝比奈はさらに考えにふける。

整った顔を難しくして、胸の花火について思いを巡らせている。

ぼくは、空つぼの笑いを浮かべた。

朝比奈、君の言っている推察は正しい。

ぼくには心がない、と思ったのはずっと前のことだ。

昔からへんなことばかりをする子供だったと親から聞いている。

そして、自分と他の人々には、決定的な違いが存在することを、ある日知った。

ぼくは、普通のことを当たり前に楽しむことが全くできない。

普通なら漫画やゲーム、あるいはスポーツなど、明るい面に走らずだった心が、なにか楽しみを見つけないことはなかった。

だから、ぼくは自分の心を、人間の最も黒い部分にそそぎこむようになった。

自分を偽って、他人や親の前では普通に漫画を読んだりした。

休み時間に遊ぼうと誘われたら、心よく引き受けた。

テレビの話題を振られた時には、すぐに答えることができる。

しかし、すべて偽物だった。

小説や漫画、新聞記事やテレビ番組などを見て作り上げた嘘の人格だ。

本当のぼくは、もっと冷たくて、もっと暗くて、無関心で、心の欠片も持ち合わせていない黒い人間だ。

胸に花火がないのは、そのせいだろう。

花火は嘘をつかない。

朝比奈が顔を上げて、ぼくを見た。

ぼくは、口端に浮かべていたうすら笑いをすぐさま消す。
気づかれただろうか。

しかし、彼女は気づいた様子を見せず、頭に手をおき、力なく首を振って溜息をついた。

思考することに疲れた様子だった。

朝比奈は立ち上がり、言った。

「変なことに付き合わせてごめんなさい。気になったから、つい…」

…

頭痛を抑えるように、こめかみに手をやっている。

「きつと、私達のこと、誰にも言わないほうがいいと思いますよ」

朝比奈は去り際に呟いて、一人、先に図書室を出ていった。

ぼくも立ち上がって、背伸びをした。

身体を軽く回して、調子を確かめる。

腰をとんとん、と叩き、呟いた。

「ぼくもそう思うよ」

きつと、これはぼくたちだけの秘密にしておいた方がいい。

そうすれば、ぼくと彼女は二人だけで秘密を共有することができ
る。

ふう、と溜息をつき、ぼくは教室へ戻った。

十

夜野君は不思議な存在だった。

彼を初めて見たのは、高校に入って初めてのある日のことだ。

彼は覚えていなかったけど、私に最初に話かけてくれたのは、彼
だった。

確か、有名なホラーの本を私が読んでいる時に、

「その作家、好きなのかい？ 全巻持つてるから、良かったら貸す

よ

と、手始めに一冊貸してくれたのが始まりだ。
貸したことを忘れていようで、返してくれという催促は、一年経ってもない。

彼の貸してくれた本は、私のブレザーのポケットに収まっている。いつでも私はそれを持ってきていた。

夜野君に返す機会を見つけようとしたけど、すぐにやめた。

自分のような暗くて冷たい人の相手を、もう二度としてくれるはずがないと決めつけていた。

そんな彼とついさつき、話をしてしまった。

しかも呼び出したのは私からだ。

昨日のことがどうしても気になって、話さずにはいられなかった。彼と話したのは、花火のことだった。

私が人の胸に花火が見えるようになったのは、ここ一年の間だ。

ある休日、メガネを家に忘れて夜道を歩いた時に気が付いたのだ。初めてそれが見えた時には、驚いた。

胸に火がともった人たちを見るたびに、今にも爆発してしまうのでは、という恐怖に駆られていた。

でも、そんなことはなかった。

火花は、爆弾の導火線に付いた火ではなかった。

もっと、人間的なものなんだ、と私は思った。

他の人も見えているのだろうか。

聞こうにも、話ができるような友人は、私にはいない。

だから、ずっとこの秘密を隠していた。

夜になると、メガネを外して近くの公園や神社に行つて、陰から人々の胸で弾ける花火を眺めた。

わずかに滲むけれども、その強くて鮮やかな光は、私を楽しくさせた。

小説くらいしかなかった私の楽しみが、ひとつ増えた。

気が向いたら、私はこの遊びに没頭するようになった。

遊びと言っても、ただ道行く人を眺めるだけだが、それだけで、つまらないという感情に縛られていた心が解き放たれるような気がした。

私の胸の花火がそれに答えるように、時折強い光を発する。

私の花火だけが普通とは違い、特徴的だ。

それはきつと、私が普通の人とは決定的に違うことを示しているのだろう。

私は他人とは違う。

そう思われていただろうし、そう思おうとしていた。

私は普通じゃない。普通の人じゃない。

普通である、というのがいやだった。

平凡な人々にうずもれて、私が薄れてしまうのが嫌だった。

私は、誰にも似てない、なににも属さない存在としていたいという気持ちがある、強くある。

だから私は、この秘密を一人で隠して、ずっと過ごしてしていた。そして昨日、久しぶりに夜野君と話をした。

ちらりとだけだったけれども、一年ぶりの邂逅に、私は驚きを隠せなかった。

あの時が暗がりによかった、と思う。

そして、シヨックを受けたこともある。

夜野君の胸には、あの花火がなかったのだ。

人間なら誰にでもあるはずなのに、それがなかった。

彼は本当の意味で普通じゃないのだと、神社で別れた後に考えさせられた。

確かに夜野君は、楽しそうに友人と話してはいるけれども、時折信じられないくらいに残酷な冷たさを持った眼で、どこかを見つめたりする。

その様変わりに、私は似た匂いを感じた。

感情の表わしかたは正反対だと思った。

私は、自分が普通とは違うこと、様変わりしていることを隠そう

ともしない。

でも、夜野君は、たまにそういう仕草を見せたりはするけれども、いつもは明るく振る舞い、自分の本性を隠そうとしている。

私は夜野君のことが好きなのかもしれない。

でも、彼のその部分は嫌いだ。

自分に嘘をついて、本心を隠している部分が。

私と同じように、隠さなければいいのに、と思う。

そうすれば、私と夜野君は、もう少しはやく話せたのかもしれない。

あの花火のことを、私は考えた。

夜野君は命かもしれないね、と言った。

でも、それだと私が指摘した通り、それが胸にない夜野君は死んでいることになる。

私は心、と言った。

でも、違うかもしれないと思いなおし、少し気分が悪くなってきたので先に図書室を出たが、考えれば考えるほど、私の心説が正しいとしか思えなくなってくる。

夜野君は、心がないから花火が胸にない。

そんなことは、できれば考えたくはなかった。

メガネのレンズを通した花火のない世界が本物で、私のこの目で見る花火のある世界が偽物だったらどんなによかっただろう。

夜野君に心がないはずがない。

この心説を認めるということは、あの時の夜野君の好意も偽りのものだと認めることになる。

それだけは絶対にいやだ。

でも……もしかしたら、という考えが、どうしても消せない。

あの、たまに垣間見せる冷たい瞳、冷めた態度。

夜野君には、心がないのだろうか。

ないのだとしたら、どうして私に、優しくしてくれたのだろう。

あの優しさは、嘘だったのだろうか……。

考えれば考えるほど怖くなる。

あれが嘘だとしたら、また私はひとりぼっちになってしまふ。今まで、ずっとひとりだった。

それがいままで続いていたのなら、耐えられたのかもしれない。でも、もうだめだ。ひとりじゃない、その気持ちを知ってしまったから。

あの、自分だけがとりのこされたような気持ちを味わうなんて我慢できない。

……どうしよう。

どうしたら、夜野君を失わずに済むだろう。

きつと、彼に対してひどい態度をむけているのだと思う。

でも、いまさらどう変えればいいかなんてわからない。

人づきあいの上手下手以前に、人づきあいの経験がないのだから、当然なのかもしれない。

他人がどういふふうに行っているのか、わからない。

だから私は、私が思うやりかたで、彼を引きとめるしかない。

私に残されている手段はそれだけだ。

腕時計を見ると、休み時間がちょうど終わりそうな頃だった。

トイレに入って、手を洗う。

ふと顔を上げると、自分と目が合った。

鏡に映った私は、今にも泣き出しそうな、情けない表情をしていた。

十

いつも思うことなのだが、時間というのはとても不思議だ。

放課後になるまでは長く感じるくせに、放課後を迎えてからの時間の経過は恐ろしくはやい。

気がついたら夜になっていて、できることといったら、寝るくらいしか残っていない。

寝るといふ最終行為にいたるまで、一体なにをやっているのか、ぼくもよく知らない。

知らない、とあえて他人事のようにいう理由は、単にその前にとっている行動がすべて無意識のうちに行われているからだ。

作業をしているときのぼくは、必要最低限の思考をめぐらせ、残りの意識はどこかへ飛ばしている。

作業を終えて、意識が引き戻されると、夜になっていたりする。

なにかに集中していると、時間の経過を忘れるとよくいうけれど、ぼくは他に類をみないやりかたでもって、それを体感しているのだらう。

学校は放課後を迎えたばかりであり、ぼくは、自分の教室で鞆に教科書を詰めている最中だ。

放課後になると、時間の経過というものを強く意識してしまう。

眼に見えないものが意識できるのは、人間くらいのものだ。

はたして、ぼくが人間なのかは怪しいところだが、外見は人間そのものなので、一応同じ部類には入るだらう。

心や命、魂は、目に見えない。

そのくせ、それらしいものを意識したり、感じ取ったりすることがある。

よくよく考えてみたら、すごいことだ。

心や魂なんて、そんなものが本当にあるのかなんて、誰にもわからない。

だというのに、それがあるといのが当然だと思われている。

世の中は不思議だ。

人の胸で弾ける花火。

これを、彼女は心ではないだらうか、と言っていた。

なるほど、面白い考えである。

綺麗な心。

汚い心。

細い心。

太い心。

大きな心。

小さな心。

人によつて、色や形や大きさを変える花火。

あんな不思議なものを定義できるのは、心という言葉くらいしかない。

魂や命だと、ぼくが生きているということと合わせて考えると、矛盾が生じることになる。

心、か。

形のないものや、不思議なものを枠組みに捉えるという点において、言葉に勝る概念はない。

そして朝比奈は的確だった。

きっと、心を最初に定義した人間は、彼女のように聡明なロマンティストだったに違いない。

朝比奈アス力。

妙な人間だな、と思う。

世界から自分を断絶している、一人っきりの少女。

系統的には、ぼくと似ている。

似ているどころか、ほとんど同じといつてもいいかもしれない。

ただ一つ違うことは、彼女が心を持っていて、ぼくは心を持っていないという、ただそれだけのこと。

それだけのことなのに、差は決定的なほどに現れる。

彼女は世界を拒否して、ぼくは世界に溶け込んだ。

危険なのは、まちがなくなくだらう。

自分は異質だということを実感して、表に出しているうちはまだ安全だ。

ふと、考える。

ぼくはどうして、それを表に出さないのだらう。

彼女のように出してしまえば楽なのに、いつの間にか茨の道を歩いていた。

目立つのを避けるためだと自分では思っていた。
果たして、それは本当なのだろうか？

いまからでも、なにか変えることができるのだろうか。
仮に変わることができるとして、ぼくはどちらを選ぶだろう。
それでも変わらないほうを選ぶのか、変わるほうを選ぶのか……。

そんな選択肢が存在しているのかすらも、わからない。
鞆を背負って、教室を出た。

赤焼けの空が眩しい。

帰りたくをすませた生徒たちが、楽しそうに会話をしている。

ぼくは、いつものように下駄箱へ向かう。

下履きに履き替えて、外へ出る。

グラウンドでは、サッカー部の人たちが汗みずくをたらしながら
ボールを追いかけて走りまわっている。

邪魔をしないように、端っこのほうを通る。

そして、校門をくぐった。

あとは、いく度となく歩んできた帰宅路を、いつものように、い
つもの速さで通るだけだ。

だが、今日はいつも通り、というわけにはいかなかった。

朝比奈が、校門をくぐった先で待っていたからだ。

「やあ、朝比奈。お疲れさま」

最低限の挨拶を交わして、通り過ぎようとする。

袖を誰かに掴まれた。

びっくりして、立ち止まってしまった。

しなやかで、白磁のような指が、ぼくの袖口をそっとつかんでい
る。

指、手首、肘、肩という順序を辿って、その手の持ち主と眼をあ
わせる。

朝比奈だ。

他のだれでもなく、朝比奈アスカその人だった。

顔を伏せていた。表情は見えない。

口を真横に結んで、ただ、ぼくの袖を握っていた。

「どうしたんだい？」

朝比奈は答えなかった。

そのまま彼女はぼくの手をにぎり、先を歩き始める。

ひっぱられたぼくは、彼女についていくしかなかった。

つつぱねるもの、悪い気がした。

きつと、なにか用があるのだろう。

そういえば昼休み、図書室を出るときに顔色が悪そうだった。

まだ今も気分が悪いから、むだな会話をしたくないのかもしれない。

おおかた、今日の昼休みの続きでもやるのだろう。そう思った。眼鏡をずらして、朝比奈を見る。

彼女の胸の花火は、体調のせいだろうか、弱々しくなっていた。

それでも、ぱちり、ぱちりと、小さいけれども強い光を放っていた。

いつか思いついた、彼女の花火の名前が頭に蘇る。

閃光花火。

閃光を発する、花火。

それは線香花火よりも明るくて、線香花火よりもたよりない。

彼女の胸にある花火だけを指す言葉。

朝比奈はさしずめ閃光少女だな、と思った。

十

空は、黒と赤の絵の具を混ぜ合わせたような色彩になっていた。

ぼくはまだ朝比奈に手をひかれている。

どこへつれていくつもりだろうか。

学校をでて、しばらく歩き続けている。

彼女は、行き先を教えてください。

話かけても、返事をしてくれない。

いつたい、なにをかんがえているのだろう。

ぼくの手を、朝比奈のほっそりした手が掴んでいる。体温がじんわりと伝わってくる。

彼女の鼓動までもが、手を通してぼくに流れ込んでくるように思えた。

ぼくは自分の脈拍が僅かに速まってゆくを感じた。

それは、少なからず意識を持ち始めた彼女と手を繋いでいる、その嬉しさゆえなのか、それともどこに連れてゆかれるか分からないという、一抹の恐怖と緊張からくるものなのか。

自分が自分ではなくなってしまったかのような感覚。

本当にぼくはどうかしてしまったのかもしれない。

自分に戸惑うなど初めてである。

胸が熱を帯びてきたような気がした。

「ねえ、朝比奈」

ぼくは彼女に声をかける。

彼女は振り向かない。

足を止めず、答えない。

「そろそろ、どこに行くのかくらい教えてくれないんじゃないか？」

まだ答えない。

聞こえていないわけではないだろう。

彼女はあえてぼくの言葉を無視している。

まるですねた子供のように彼女は黙っている。

ぼくの手をひっぱるといふ行為が、彼女なりの主張なのかも知れない。

そうして数分連れられるがままに歩いたとき、見知った道に出た。家の近くの、神社へ続く道だ。

ぼくがよく立ち寄る神社。

ぼくと朝比奈が出会い、お互いが、人に花火を見ることができるところを推測した場所でもある。

神社の境内に入る。

そこで彼女は手を離れた。
振り返る。

ぼくと視線を合わせた。

凜とした瞳に射抜かれ、ぼくは彼女の顔に釘付けになった。

眼を離せない。

ぼくに、他の物を意識させないほどの魔力が、そこに秘められていた。

「朝比奈……？」

彼女はぐつと唇をかみしめた。

目が潤んでいた。

頬も赤味を帯びていた。

かすかにふるえている。

涙を必死にこらえているように見えた。

どうしたというのだろう。

朝比奈が明確な感情を表しているところを、ぼくは初めて見た。

息が詰まりそうになり、ぼくは自分の胸を掴んだ。

心臓が警鐘を鳴らす。

頭の中で、冷たい波が波紋を広げてゆく。

決定的な失敗を犯してしまった　そんなことを思わせる不安が

ぼくに襲いかかる。

どうして彼女はこんな顔をするのだろうか。

大丈夫なのだろうか。

そんなことを考える。

朝比奈の瞳から、大粒の涙が一筋こぼれた。

「私は……」

ぼろぼろと涙をこぼし、朝比奈は言葉を滲ませた。

「私は、今まで……ずっと一人だった。それでも、いいと思いましたが、だって、普通でいることが嫌いだっただから……。誰かと仲良くなるために普通の女の子でいなければいけないのなら、友達なんて

いらぬ。そう思つて今まで生きてきました……。

でも……でも、私、夜野君とは、仲良くなりたいつて思つたんです。私と同じような人だからかもしれない……」

朝比奈、ぼくは……。言葉がついて出そうになる。

「初めてだつたんです。私に声をかけてくれた人は……。夜野君は、こんな私に声をかけてくれて……。そして、私と同じように、花火を見ることができ……」

確かにぼくは普通じゃない。君と同じように異質な人間だ。

「もしかしたら私は、あなたが好きなのもかもしれません……」

ぼくも……君のことが好きなのもかもしれない。でも……。

「だから……私を、一人にしないでください……。ずっと、傍にいて……」

でも、ぼくは……。

「無理なお願ひだつてことは、分かつてます……。でも、あなたの傍にいたいんです。あなたに、傍にいてほしいんです……」

ぼくは、心を持たない人間だから、きみを……。

きみを……傷つけてしまふかもしれないんだ。

朝比奈はとめどなく涙をあふれさせている。

彼女が泣いている。

ぼくが泣かせている……。

考えるだけで、胸がしめつけられ、苦しくなる。

ぼくも思わず泣いてしまひそうになる。

「朝比奈、ぼくは……」

呼吸を必死で整え、ぼくは言葉を紡ぐ。

こんなに取り乱したことは今までない。

「ぼくも……ぼくも、君が好きなのもかもしれない……」

朝比奈が顔をあげてぼくを見た。

涙が彼女の頬を伝い、しずくとなって地面を叩いていた。

その顔には、戸惑いと嬉しさが渦を巻いていた。

「でもぼくは……心がない人間なのかもしれない。なにか大切なも

のがあっても……大切なことがあっても……心の底では、そんなのどうなったってかまいやしないと考えている。それを、ぼくはよく感じる……」

頭で考えるよりも、心で思うよりもはるかにはやく、口が動いていた。

「だから、きみのことが好きなのだとしても……きみなんかどうだっていい、と思ってしまえば、ぼくが心の奥に潜んで、離れてくれないから……ぼくは……」

ぼくは……きみの傍にはいられない。

その言葉は、ぼくの口から発せられることはなかった。とても口に出すことができなかった。

もう……、もうだめだ。

この場所にいられない。

とどまり続ける勇気が、ぼくにはない。

ぼくは走った。

朝比奈を突き飛ばすようにして走った。

走って走って走り続けた。

振り向かない。振り向けない。

終わりだ。

何もかも終わりだ。

朝比奈とはもう、これで終わりだ。

これから関わることもなくて、絶対にできない。

胸がとても熱い。涙があふれて、止められなかった

十

私が止める暇もなく、夜野君は行ってしまった。突き飛ばされそうになって、私は尻もちをついた。

その拍子に、眼鏡がはずれてしまい、どこかへ弾け飛んでいった。立ち上がるうとした。けれどできなかった。

立ち上がるうとする足がはげしく震えて、とても力をこめることができなかった。

私は座り込んだまま、地面の土を握りしめる。

夜野君

かわくような寂しさが、悲しみが、わきあがってきて止まらない。止められない。

孤独の闇が心をゆっくり、ゆっくりと包んで行く……。

夜野君は……泣いていた。

顔をゆがめて、とても悲しそうに、苦しそうに、泣いていた。

私はそれを見て、どきりとした。

夜野君の胸には、小さな　とても小さな、花火のかけらがはじけていた。

生まれたての花火が、よわよわしく、それでも精一杯の輝きをはなちながら、はぜていた。

ぱちぱち……ぱちぱち、と。

赤い光を発しながら、ぱちぱち、ぱちぱちと……。

「夜野君」

私はまた、彼の名前を呟いた。

夜野君、あなたは……。

あなたは、心がないと言った。

自分は、心がないから、私を　朝比奈アスカを好きでいることができる保証はどこにもないから、私とは一緒にいられない……。

あなたはそう言った。

けれど、今のあなたはどうなの？

あなたが……欲しがっていたかどうかはわからないけれど、でも心を本当に手に入れたのだとしたら……あなたは、私を好きになっ
てくれるの？

私を一人にしないで、ずっと、傍にいてくれるの……？

尋ねかけたところで、返事はない。

夜野君は、答えてくれない。

きつと、もう、戻ってこない。

そうして、私と夜野君の繋がりには絶たれて、これから先、私と夜野君の人生が交わることなど二度とないのだ。

そう思うと、私はもう、とても立ち上がることもなんてできなかつた。

このまま、どこまでも、沈んでいきたい。

一人ぼっちのまま、だれにも関わらずに、ずっと生きていくんだ。寂しく、みじめに……

生きていく……？

生きていて、どうするの？

もうだれもないのに。

私に干渉してくる人なんて……だれも。

それなのに、私は生き続けるの？

生き続けて、それで……何ができるの？

こんな私に。

いや、なにもできない。

できやしないんだ。

私なんかには、なにも……。

ずっとずっと泣き続けて、涙がかれてしまつて、それでも泣き続けて、やがてうごかなくなつて、冷たくなつて、死んでゆく。

そうなつても、もうだれも悲しんでくれない。

私のために涙を流してくれる人は、私の前から姿を消した。

だったら、ひあがつてゆくようなこの悲しさを、私の胸に 小

さな、小さな花火がはじける、この胸の中に抱いて、だれにもじゃ

まされずに、ひっそりと……うごかなくなろう。

心に呼応するように、涙は次から次へあふれてくる。

湧き上がる泉のように、滾々と……。

私はそつと、瞳を閉じた。そして、地面に横たえる。

このまま、眠ってしまおう。

いつまでも、いつまでも。

胸の花火の光が心細くて、そして、少しだけ。

十

閉じた扉は、二度と開かない。

開くことはない。ぼくは家の扉をかたく閉じて、眼鏡を外して投げ飛ばして、ベッドに飛びこんだ。

そして、枕に顔をうずめた。

枕のカバーに、冷たいしみが広がってゆく。

ぼくの涙。

他のだれのものでもない、ぼく自身の涙だった。

この身を溶かしてしまいたいそうなほど熱いそれは、ぼくの目頭からどンドン湧き出てくる。

初めて堰を切った激情は引くことをまるで知らない。

ぼくの思惑を完全に無視して、所せましと暴れまわる。

ぼくには、どうすることもできなかった。

こんなことは初めてだった。

こんなにも苦しくて、苦しくて、苦しくて、たまらないなんて。

自分でかんぺきに支配してきた自分の感情を、まるで制御できない。

ただ、はてしなく苦しくて、悲しい。

心に穴があいた、という言葉では生ぬるい、そんな重いよどみが胸の中でうずを巻いている。

ぼくのか弱い心は、その重みに今にも押しつぶされそうで……。

そして、とても熱い。

涙をこぼしながら、ぼくは顔を上げた。

情けない声が、たえだえにぼくの口からもれている。

それは、うめき声だった。

心を押しつぶす重圧に、苦しむ声だった。

そのとき、ぱちぱちと……なにかが弾ける音が、耳に届いた。

ぼくは涙もぬぐわずに、視線を部屋中にいきわたさせる。けれど、なにもない。

弾けるようなものなど、なにも。

ぼくは、重くて苦しくて、そして熱い自分の胸に手をやり、視線を落とした。

そして、ぼくはなぜぼくがこんなにも悲しみに囚われてはなされないのか、その理由を知った。

それは……花火だった。

生まれたての花火は産声を上げるよう弾け、ときおり、朝比奈のそれのように閃光を飛ばして、ぼくの胸に、火の花を咲かせていた。

ああ……。

心だ。

ぼくは思った。

からっぽの、人形のようなぼくに、心が 心が吹き込まれたのだ。

笑って、泣いて、怒って、楽しんで そんなことができるようになる心が、ぼくに宿されたのだ。

だから、こんなにも感情があふれてくる……………。

朝比奈、ぼくは……ぼくは心を手に入れた。

手に入れたんだ。

きみを、大切に思うことができるようになった。

だれよりも この世界でだれよりも、一番、きみのことを大切に思える。

きみのそばにいられる。

きみのとなりで、きみをずっとずっと、守り続けることができる。今なら、確かにいうことができる。

「きみが好きだ」という一言が。

許されなくてもいい。

ぼくを恨んでくれてもいい。

だって、恨まれるようなことを、憎まれるようなことを、ぼくは

いつてしまったのだ。

だから、まだ　まだ、あの場所にきみがいるのならば、ぼくはきみに謝りたい。

そして、伝えるんだ。「きみが好き」という、ぼくの気持ちを。

立ち上がり、ぼくは部屋を飛び出した。

身勝手なぼくは、祈っていた。

彼女がまだ、あの場所にいてくれることを。

たのむ……いてくれ。

いや、たといえいなかったら、その時はぼくがこの足で彼女をさがして、走り続ければいい。

彼女を見つけるまで、いつまでも、どこまでも。

ぬれた土のにおい。

神社が近い。

動悸が早まってゆく。

駆け足は、いつの間にか全力疾走になっていた。

境内に走り込み、そして、朝比奈と別れた場所へ向かった。

ぼくはその場所に舞い戻ってきたのだ。

そこに、彼女は横たわっていた。

心臓が、口から飛び出してしまいそうなほど、大きく跳ね上がった。

「朝比奈！」

絶叫に近い叫び声をあげて、彼女に駆け寄った。

頬に触れる。

まだ、ほんの少しだけ温かい。

手に触れる。

冷たい。

とても冷たい。

ふるえている。

ああ、どうしよう。ぼくのせいだ。

彼女をゆすった。

反応しない。

胸に宿った花火は、今にも消え入りそうなほど、弱々しくなっていた。

ぼくは彼女の手を取って、自分の頬にあてた。

また熱い涙があふれていた。

「朝比奈、朝比奈 おきてくれ」

ぼくは語りかける。目を閉じたまま、彼女はうごかない。

「たのむよ、目をさまして……」

彼女を抱き起こして、頬に顔を寄せる。自分のふるえる声が、自分の耳によく届いた。

「きみに伝えたいことがあるんだ。だから 目を、目を覚まして

……」

彼女は動かない。

「朝比奈……ぼくは、ぼくはね……」

きみが好きだ。彼女の耳元で、涙でにじんだ声で、ささやいた。

「信じられないかもしれないけれど、ぼくは……心を手に入れたんだよ、朝比奈。だから、きみが……きみが、前よりももっと愛おしい。きみが大切に、仕方がないんだ」

朝比奈を抱き起こしたまま、彼女の手を取る。

そしてそれを、ぼくの胸に当てる。

「ほら、暖かいだろ？ きみと同じ花火が、この胸に灯っているから……」

もう、きみを一人になんてしない。

たとえ、ぼくときみが、この世界から切りはなされているのだとしても、ぼくは、きみのそばにい続けるから。

この命が尽きはてるまで、ずっと、ずっと……。

「だから、おきてくれよ……お願いだから……」

ぼくの涙が、彼女の顔を叩いた。そして、

彼女は、瞼をそろそろと開いた。

眠り姫が千年の眠りから解き放たれたように、彼女はゆっくりと、

目を覚ました。

「ほんとうに……?」

彼女は、掠れた声で言った。

「ほんとうに……そばにいてくれるの? いつまでも……私を好きでいてくれるの……?」

ぼくは、なんども頷いた。

彼女は、ぼくの手をぎゅっとにぎり返して、微笑んだ。

「よかった……」

気持ちを確かめるように、ぼくたちは短い口づけを交わした。

そしてぼくは彼女を、そっと抱きしめた。

彼女は弱々しくだけでも、でも確かに、抱きしめ返してきてくれた。

お互いの胸の花火が、僕たちを祝福するように、小さな閃光を放っていた。

閃光花火了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4098q/>

閃光花火

2011年3月20日21時10分発行